

「存在の連鎖」に見るアナロジーの展開

山 田 仁 子

On Analogies of “the Chain of Being”

Hitoko YAMADA

Abstract

Philosophers and biologists have compared our world to various images, like “a net,” “a map,” “a ladder,” “a chain,” or “a flourishing tree.” These analogies have helped them to think about this world of nature, and have helped their readers to understand their theories.

However, “one image” does not always mean “one and the same theory.” An image allows for different interpretations and lets the readers think of some new theories. And sometimes these new theories need new different images. In analogy, there are interactions between what is to be described and what is used to describe.

This paper explores the interactions between the theories of nature which are called “the chain of being” and the images used to represent them, and investigates the functions of analogy in general.

序

人間を始め動物や植物などが生きるこの世界、あるいは時にこれに死せる者や、神や天使をも含めた世界は、古代から何らかの具体的な物のイメージになぞらえることにより、つまりアナロジーにより説明され、また理解されてきた。「網」や「地図」、「階段」や「梯子」、「鎖」、また大きく成長した「樹木」の姿など、様々なイメージが、こうしたアナロジーに用いられている。とりわけ、「階段」や「梯子」や「鎖」と「樹木」は何世紀にも渡って頻繁に利用された。「階段」や「梯子」や「鎖」のイメージによる世界の捉え方は「存在の連鎖」“Chain of Being”という表現により、また「樹木」のイメージによる世界の捉え方は「生命の木」“Tree of Life”という表現により、多くの文献に記されている。

世界を理解するためのアナロジーにおける、イメージとこれが表わす世界観は、しかしながら、一対一の固定した関係を保つものではなかった。「鎖」や「樹木」のイメージが表す意味は、そのイメージを使用する人によりずれが見られ、また時代の流れとともに変化してきた。その変化は、更に新しいイメージを生み出すことにもなった。

本稿では、特に「存在の連鎖」という表現で表される世界像の確立において、イメージがどのように機能してきたかを分析し、アナロジー一般の機能について明らかにするてがかりとしたい。

第一章：「存在の連鎖」の萌芽

「存在の連鎖」とは、概して言えば「存在するすべてのものを、最も低いものから最も高いものへと順番に連続的に位置づける考え方」であり、「充満・連続性・直線の上昇の観念で特徴づけられる」（『岩波哲学・思想事典』、p.997）が、この「存在の連鎖」という表現で表される世界観は始めからこうした特徴を全て備えた形で登場したわけではない。Lovejoy (1936) が詳しく分析しているように、様々な変遷を経てこのような世界観が生まれた。またこうして生まれた世界観は、広く行き渡るうちに、更に変容していった。「存在の連鎖」という世界観の誕生と変容について分析すると、そこにアナロジーが大きな役割を果たしてきたことが明らかになる。

「存在の連鎖」という表現に含まれる「鎖」というイメージが明確に残る最も古い文献は、紀元前8世紀頃のホメロスの『イリアス』における「黄金の鎖」である。(Patrides, p.577) しかし、世界観そのものの萌芽は、プラトンが唱え

た「充満」の原理 (Lovejoy, p.30) と、「秩序」の原理にあると考えられる。次にあげるプラトンの『ティマイオス』よりの引用部分(1)、(2)は、この二つの原理をそれぞれ明確に表している。

- (1) 死すべきもの、不死なるもの、どちらの生きものをも取り入れて、この宇宙はこうして満たされ、目に見える、もろもろの生きものを包括する、目に見える生きものとして理性の対象の似像たる、感覚される神として、最大なるもの、最善なるもの、最完全なるものとして、それは誕生したからです。そして、これこそ、ただ一つあるだけの、類なき、この宇宙にはほかならないのです。 (『ティマイオス』、p.178)
- (2) (生成する事物すべてのこの宇宙万有の構築者は、) 無秩序な状態から秩序へと導きました。 (同上、pp.31-32)

プラトン自身はここでは何か具体的な物のイメージを借りて世界の有り様を説明することはしていないが、(1)の文章は「あらゆるものでぎっしりと満たされた閉じられた空間」としての宇宙の姿を想像させ、また、(2)は宇宙を満たす万物が、秩序よく「配列」した状態を想像させる。まだ抽象的ではありながら、何らかのイメージはできあがりつつあったと言えるだろう。

アリストテレスによる世界についての考察には「連続」の概念が登場し、これも「存在の連鎖」の世界観へとつながった。『動物誌』では様々な生物についての観察が記述され、生物間の関係がより具体的なレベルで論じられる。生物の分類が試みられるが、その困難さが次の部分で「連続」という概念により説明される。

- (3) このように自然界は無生物から動物にいたるまでわずかずつ移り変わって行くので、この連続性の故に両者の境界もはっきりしないし、両者の中間のものがそのどちらに属するのか分からなくなる。すなわち、無生物の類の次にはまず植物の類が続き、植物の中の各々は生命を分与されていると思われる程度の差によって互いに異なるが、植物の類全体としては他の [生命のない] 物体に対してはほとんど生物のようであり、動物の類に対しては無生物のように見えるのである。いま述べたように、植物から動物への移り変わりは連続的である。現に、海産の生物には動物なのか植物なのかよく分からないようなものがある。... また、動物間では一つ一つがわずかの差異をもって段々に生命と運動性を増して行く。 (『動物誌』第8巻 第1章) (下線は筆者)¹⁾

ここでアリストテレスが論じる「連続」性は二つの意味に細分される。(3)の前半部で特に述べられるのは、類と類の間に「重なり」があるほどに「境界が明確でない」ことであり、後半部も含めた全体として述べられる連続性は「生命と運動性」という座標軸上に自然界のものが「直線的に並ぶ」ことである。「直線的に並ぶ」ということは、次にその並ぶ「順序」についての決定を求める。だが、この点についてのアリストテレスの立場は明確ではない。(3)では「無生物から動物」へ、「植物から動物」へという表現になってはいるが、『動物誌』全体においてその形態や行動が詳述される様々な生物の記述される順序は、次に挙げる(4)に見られるように、ヒトや有血動物に関するものが先で、無血動物などは後で逆行している。「順序」について、何が先に来なければならないという明確な信念をアリストテレス自身が持っていたとは考えられない。

- (4) ヒト以外の動物を分類するときの区分となる、動物界最大の類は、次のとおりである。すなわち、一つは鳥類、一つは魚類、もう一つはクジラ類で、これらはみな有血である。さらに、もう一つは殻皮類で「貝類」といわれる。もう一つは軟殻類で、... もう一つは軟体類で、... 有節類はまた別である。これらはすべて無血であって、足のある場合は多足である。... この他の動物には、もう大きな類はない。 (『動物誌』第1巻 第6章)

プラトンとアリストテレスの世界観は、「存在の連鎖」を始めとする後世に登場する様々な世界観の源泉となったが、また同時に、プラトンの「充満」と「秩序」、アリストテレスの二つの「連続」の概念、つまり「境界が明確でない」と「直線的に並ぶ」といった概念は、「鎖」など、後世に描かれる世界像を表す様々なイメージを生み出す源泉ともなった。

第二章：世界観とイメージの展開

プラトンの「充満」と「秩序」の概念、アリストテレスの二つの「連続」の概念、つまり「境界が明確でない」と「直線的に並ぶ」ことから、どのような世界像を表すイメージが生まれ、変化していったか、また、このイメージの変化と世界観の変化がどのように関係したのかを、本章では詳しく論じていく。

1) 本論でとりあげる例文においては、本論の議論に特に関係があると思われる個所に適宜、下線を施した。

まず、「充満」と「境界が明確でない」という意味での「連続」の概念が結びついて生まれたイメージは「網」である。18世紀にヴィタリアーノ・ドナティは自然の姿を「網」の目に喩えた。(Larson, p.56) このイメージでは万物が互いに複合的に結びつき合っており、アリストテレスが論じる「連続」性のうち、「境界が明確でない」点が強調される。「密接な複合的な結びつき」の「連続」で、「網」は縦横に広がり、またプラトンの「充満」の概念も表す。一方この「網」のイメージは、「秩序」や「直線的」な「連続」は表さない。

同じく18世紀に植物の分類体系を築き上げたカール・リンネは、(5)に見るように植物界を「地図」(Mappâ)に喩えた。また(6)にあるように、自然の体系全体を鉱物と植物と動物の三つの「王国」(regnum)に分けている。いくつもの「王国」が描かれる「地図」ということで、この二つの例は合体して統一したイメージを伝える。このイメージでは、(5)の文章にもあるように、万物の「連続性」が表される。アリストテレスの「境界が明確でない」という意味の「連続」の概念を引き継ぐものだが、「王国」の境界は「重なり」を許さず明確であることから、「境界を接する」という意味での「連続」に変化していると言える。

(5) Natura non facit saltus. Plantæ omnes utrinque affinitatem monstrant, uti Territorium in Mappâ geographicâ.

(Linnaeus, *Phil.* n.77/Jussieu, xxxv)

(6) Observationes in Regna III. Naturæ. (Linnaeus, *Systema Naturæ*)

「王国」という語は、「地図」以外の語と結びついて、別のイメージを表す可能性がある。実際リンネは、“regnum”(王国)に加えて“classis”、“ordinis”といった語彙を用いて、動植物を分類した。こうした語彙の組み合わせが加わると、「地図」というよりも、そこに住む人間の「階級社会」のイメージを作り上げることになる。「連続性」を認めながらも明確な分類を第一に目指すリンネの体系においては、「地図」よりも明確に「区切り」を強調する「階級社会」のイメージの方が、適していたと思われる。「階級社会」のイメージにおいては、「地図」が表していた「充満」と「境界が接する」という意味での「連続」の概念は薄くなり、「区切り」のはっきりした「秩序」の概念を主に表すことになる。リンネの時代の社会における「秩序」は「直線的に並ぶ」という「連続」の概念にも結びつく。更に新しい要素として、「上下」の「方向性」も加わる。

リンネが抱いていた「階級社会」のイメージに「上下」関係が重要な位置を

占めていたことは、リンネが自分自身も含めた植物研究者たちを大将から曹長までに喩えて分類したことからも明らかである。リンネは自らを大将に喩え、植物学者の世界の最上位に位置づけた。

(7) 大将	リンネ	ウプサーラの教授
少将	ジュシュー	パリの教授
大佐	ハラー	ゲッティンゲンの教授
	グロノヴィウス	ライデンの評議員
	ロイエ	ライデンの教授
	ゲスナー	
中佐	...	(Goerke, pp.135-137)

リンネがまとめた動物界の体系においては、人間が先で、四足類、二足類、無足類などが後に続く。(Linnaeus, *Systema Naturæ*, "Regnum Animale") リンネは人間を「秩序」ある動物体系の「上位」に位置づけたのである。

「上下」の「方向性」は、13世紀のスペインの修道士ラモン・ルルの描いた階梯図(8)にも見られる。

(8) ラモン・ルルの階梯図

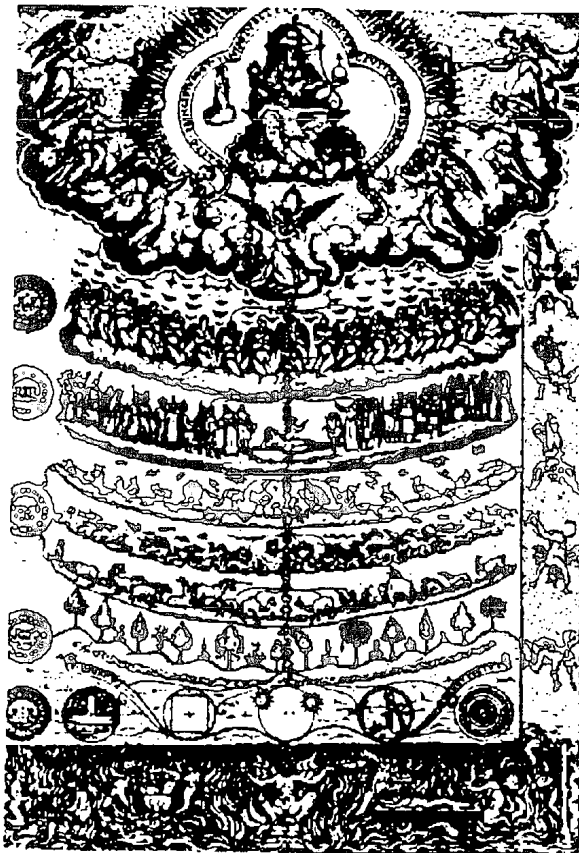


(長谷川他、p.189)

(8)においては、鉱物が最も低い段に対応し、草花、樹木、動物、人間、天使、神と一段一段高くなる。また、階段に足をかけた人の姿は、神を見上げながら上を目指す。この「階段」の「上下」の位置関係は、当時のキリスト教世界における、神による被創造物の「価値」の違いを表している。また、段に足をかけ上を目指す人の姿が「下から上へ」という「順序」を感じさせるが、これは神を敬い自らの向上を目指す、人間の視線の方向を表すに過ぎず、被創造物自体について「上から」でなく「下から」だと選択して順序を示すわけではない。価値体系は固定したものとして捉えられている。「階段」のイメージは「上下」の「方向性」に加え、やはりリンネが用いた「階級社会」のイメージと同様、「秩序」と、「直線的に並ぶ」という「連続」の概念を表す。

「階段」のイメージが伝えるものとほぼ同様の世界観を表すイメージに「上から垂らされた鎖」がある。このイメージは「上から垂らされる」ことにより「上下」の「方向性」を表し、輪が一つ一つ上から下まで「まっすぐにつながる」ことにより「直線的」な「連続」が表される。16世紀には次の(9)のような「階段」と「鎖」を組み合わせた絵も描かれた。

(9)



(ウアラデス／『西洋思想大事典3』、p.573)

「階梯」と「鎖」のイメージはどちらも「上下」の「方向性」や「直線的」な「連続」性などを表し、それぞれにほぼ同様の世界観を伝えるが、強調する概念にはやはり差がある。(9)の図においては両方のイメージを合体させることにより、それぞれが強調する概念を区別して明確に示すことになっている。「階梯」の部分は「秩序」を、「鎖」の部分は「直線的に並ぶ」という「連続」性を明確に強く表す。「鎖」が表す「連続」性は「階梯」が表す「連続」よりも切れ目の少ない細かな「連続」である。

次に挙げる18世紀のポープの詩にも「階梯」と「鎖」の組み合わせが見られる。この例では、段が一つ欠ければ階段全体が崩れ落ち、輪が一つでも欠ければ「鎖」全体がこわれ落ちると述べるところから、「階梯」も「鎖」も共に「連続性」と、更には「充満」の概念をも表しているが、やはり「鎖」の方がより細かな「連続」を表している。

- (10) 存在の巨大なる連鎖よ、神より始まり、
 靈妙なる性質、人間的性質、天使、人間、
 けだもの、鳥、魚、虫、目に見えぬもの、
 目がねも及ばぬもの、無限より汝へ、
 汝より無に至る。より秀れしものに我等が
 迫る以上、劣れるものは我等にせまる。
 さもなくば、創られし宇宙に空虚が生じ、
 一段破れ、大いなる階段は崩れ落ちよう。
 自然の鎖より輪を一つ打ち落とせば、
 十分の一、千分の一の輪にかかわらず
 鎖もこわれ落ちよう。

(Lovejoy, pp.62-63)

「階梯」に「鎖」が加わると神の位置づけも変化する。(9)、(10)において「鎖」がつなぐ「階梯」の「段」は神より始まり天使、人間、動物といった順になっており、この「連続」は(8)のルルの階梯図の場合と同様に、キリスト教世界における万物の「価値」の違いを表す。しかし、「鎖」のイメージが加わることで、「階梯」のみのイメージの場合にはなかった、神と被造物の間の明確な断絶が示されている。「階梯」のみの場合、神は人間や動物と連続する段上に位置するが、「鎖」の場合には、神は「鎖」を垂らす存在であり、この「鎖」に被造物全てが結ばれゆだねられる。「鎖」のイメージは「神」のこの世の全てを生み出す創造主という特別な位置を「階梯」よりも明確に示すのである。

進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィンの著書『ズーノミア』(ZOONOMIA)には進化論の思想が見られるが、宇宙万有の体系について語るにあたっては、進化論でよく用いられる「木」のイメージよりも「鎖」のイメージの方が用いられている。『ズーノミア』の次に挙げる(11)の部分では、“perpetual chain of causes and effects”, “the links of these chains of being”という表現が見られる。

- (11) This perpetual chain of causes and effects, whose first link is rivetted to the throne of GOD, divides itself into innumerable diverging branches, which, like the nerves arising from the brain, permeate the most minute and most remote extremities of the system, diffusing motion and sensation to the whole. As every cause is superior in power to the effect, which it has produced, so our idea of the power of the Almighty Creator becomes more elevated and sublime, as we trace the operations of nature from cause to cause, climbing up the links of these chains of being, till we ascend to the Great Source of all things. (E. Darwin, pp.532-533)

(11)において「鎖」が「連続」を示し、また神を頂点とする「上下の方向性」を含む点は、上述のいくつかの例と共通する。ただしここに見られる「連続」は被造物の「価値」の並びを表すというよりも、「原因と結果」という「創造」の「順序」を表す点が、上述の例とは大きく異なる。結果、一つ一つの「鎖」の輪が示すものも異なる。ここでは第一の輪はごく単純な物質であり、これが分岐して第二の輪ではより複雑な物質になり、第三の輪では更に複雑な物質になるといった具合に、単純なものから複雑なものへと並ぶ。(11)において「鎖」が神の玉座より垂らされており、神が最上位に位置する点はこれまでと変わらないが、その下の単純なものから複雑なものへという「順序」は、天使、人間、動物、植物、鉱物へと並んでいたこれまでの例とは逆行している。次の(12)の部分で、第一の輪はより具体的な姿となる。動物が生成していく「鎖」の第一の輪は“one living filament”ではないかという仮定が提示される。そしてこの“one living filament”が複雑な動物へと発展していく時に、神は“THE GREAT FIRST CAUSE”という役割を果たすのである。

- (12) would it be too bold to imagine, that in the great length of time,

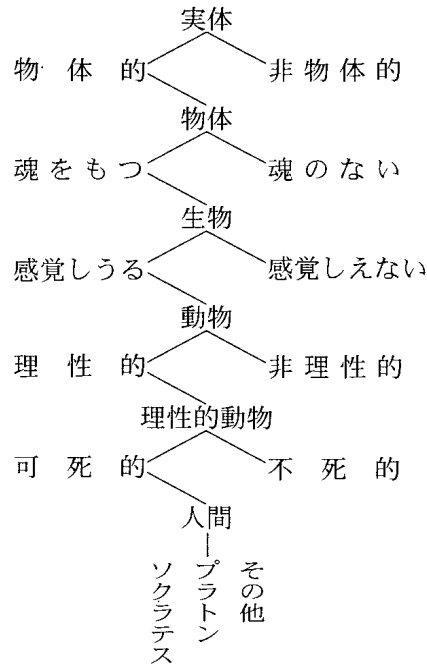
since the earth began to exist, perhaps millions of ages before the commencement of the history of mankind, would it be too bold to imagine, that all warm-blooded animals have arisen from one living filament, which THE GREAT FIRST CAUSE endued with animality, with the power of acquiring new parts, attended with new propensities, directed by irritations, sensations, volitions, and associations; and thus possessing the faculty of continuing to improve by its own inherent activity, and of delivering down those improvements by generation to its posterity, world without end! (Ibid., p.505)

少し戻るが、(11)においては「鎖」のイメージが示す「上下の方向性」に加えて、“climbing up”, “ascend” といった下から上への「移動」を表す語彙が含まれていた。(8)で見たルルの階梯図における段に足をかけた人の姿にも似て見えるが、ルルの階梯図における下から上への方向性が宗教的に価値の向上を目指す人間の視線の方向を表していたのに対して、(12)では万物の根源を探究する人間のたどる視線の移動を表している。「下から上へ」という視線の「方向性」は共通するのだが、ルルの階梯図で視線の先が神に集中するのに対し、エラズマス・ダーウィンの「鎖」での視線は、「鎖」の「輪」を一つ一つ確認しながら移動していく。

更に(11)で注目すべきは、「鎖」が“divides itself into innumerable diverging branches”とあるように、「分岐」している点である。「鎖」のイメージは「直線」に適しており、「分岐」にはそぐわない。イメージとイメージにより表されるものの間にズレが生じている。「鎖」のイメージは18世紀にはボネなどの著述に見られるように全盛を極めたが、(11)に見られるようなイメージとイメージにより表されるもののズレが、新しいイメージを要求することになる。19世紀に広がったチャールズ・ダーウィンの進化論では、「分岐」が重要な要素になり、「分岐」を表すのにふさわしい「木」のイメージが、盛んに用いられるようになるのである。

「分岐」については、古いところでは3世紀の新プラトン主義の思想を表す「ポルピュリオスの樹」(13)に見られるが、この図が「樹」と呼ばれるようになったのは後世になってからのことで、「木」のイメージは当初は結びつけられてはいなかった。実際この図の「分岐」は、端的に二分法を表す、単純な二またの連続であり、実際の「木」の形とはほど遠い。

(13) ポルピュリオスの樹

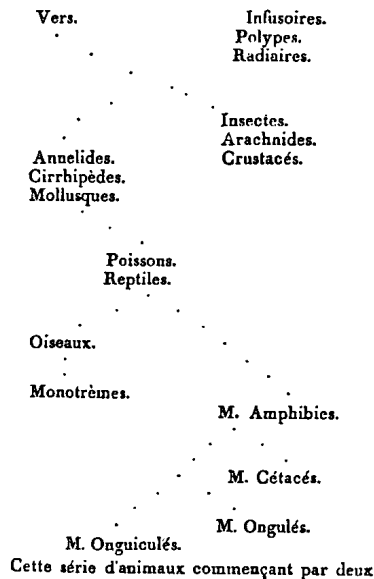


(『イサゴゲー』、p.429)

チャールズ・ダーウィンに先んじて進化論を唱えたと言われるラマルクがその著書『動物哲学』(Philosophie Zoologique)の中で描いた、さまざまな動物の起原を示す図にも「分岐」は見られる。だが、この図も「ポルピュリオスの樹」と同様、単純な二またの連続と言ってよい。

(14) ラマルクの、さまざまな動物の起原を示す図

TABLEAU
Servant à montrer l'origine des différents animaux.



(Lamarck, p.463)

ラマルク自身の文章において動物の体系を表すのに用いられる比喩的表現も、「木」ではなく「階段」や「鎖」となっている。(15)は(14)の図についての説明の一部だが、“branches” (枝) という表現が用いられるものの、図全体に対応する表現としては「木」ではなく、“echelle” (階段) が用いられる。

- (15) On y verra que, dans mon opinion, l'échelle animale commence au moins par deux branches particulières, ... (Lamarck, p.462)

同書中次の(16)の部分では、“la Chaîne animale”と、やはり動物の体系が「木」ではなく「鎖」の表現を用いて表されている。

- (16) Degradation et simplification de l'organisation d'une extrémité à l'autre de la Chaîne animale, en procédant du plus composé vers le plus simple (Ibid., p.130)

(16)の「鎖」に「両端」(“extrémité”)があることは、この「鎖」が明確な「直線」のイメージを持つものであることを示している。ラマルクは同書の中で、構造的に複雑な動物と単純な動物を「両端」とする「直線」的な「秩序」が自然に存在することを前提として論を進める。「直線」のイメージは「直線」の「方向」がどちらに向かうかについて、つまり直線上に並ぶものの「順序」についての決定を要求する。ラマルク以前までは、「順序」は意識して論じられることはなく、ただアリストテレスの『動物誌』に取り上げられる生物の順序をはじめ、リンネの『自然の体系』(Systema Naturæ)における生物の順序、「鎖」の絵において神から垂らされる万物の順序など、人間が他の動物よりも先に置かれる、つまり構造的に複雑なものから単純なものへという「順序」が慣例となっていたが、ラマルクはこの「順序」についての見直しを行う。エラズマス・ダーウィンの場合、その「順序」が崩れてはいるが、それは意識的に「順序」の見直しをしたわけではなく、神を出発点とした「順序」に従い思考を進めようとする態度は変わらなかった。ラマルクは慣例通りの「順序」を、これが「自然の本当の秩序」に合致したものであるのか疑いを持ち、意識的に見直したのだ。 (17)にあるようにラマルクは、慣例の、より完全なものから不完全なものへという「順序」は、我々人間にとって重要であったり、親しみあるものを先に論じたいという人間の志向だけに起因しているとして批判した。

- (17) L'usage qui s'est introduit, et que l'on a suivi jusqu'à ce jour, de mettre en tête du règne animal les animaux les plus parfaits, et de terminer ce règne par les plus imparfaits et les plus simples en organisation, doit son origine, d'une part, à ce penchant qui nous fait toujours donner la préférence aux objets qui nous frappent, nous plaisent ou nous intéressent le plus; et de l'autre part, à ce que l'on a préféré de passer du plus connu en s'avancant vers ce qui l'est le moins. (Ibid., p.270)

ラマルクは著書『動物哲学』の中で、前半、複雑なものから単純なものへというそれまでの慣例に従った「順序」の妥当性をまず検討し、次に後半部分で、単純なものから複雑なものへという「順序」の可能性を探った。「自然の本当の秩序」に合致した「順序」の根拠を、結局ラマルクは種の生成の順序に求め、これに対応するのは単純なものから複雑なものへという「順序」であると結論づけた。ラマルク以前、種は不変とする考えが主流であり、「鎖」などの「直線」のイメージ上に並ぶ種の「順序」は、種の「価値」の違いに従った「並び」や、動物を分類する科学者の「目の動き」がたどる「方向」だった。ところがラマルクは動物の構造は「変化」するもので、種は初めから全て同時にそろって生成されたのではなく、単純なものから複雑なものへと順々に「生成」したのだとして、「直線」のイメージ上に並ぶ種の「順序」の根拠を、種そのものに見出したのだ。

進化論を唱えた人物にはラマルク以外にももちろんチャールズ・ダーウィンがいるが、ダーウィンの場合は「直線」のイメージが変化する。ラマルクはあくまで「存在の連鎖」の伝統にのっとなって、「両端」のある「直線」のイメージの枠の中で考えを進めた。線に「分岐」は見られるものの、二またまでのものである。これに対して、ダーウィンは線の途中の「分岐」に注目した。「分岐」は二またにとどまらず、ダーウィン自身が「サンゴ」や「木」と表現したような、複雑な「多岐」を成すことになり、単純な「直線」のイメージは捨て去られた。

ま と め

以上、世界像を理解するためのアナロジーがいかに関与してきたかについて、特に「存在の連鎖」の世界観をめぐって考察してきた。

プラトンの宇宙観に現れる「充満」と「秩序」という概念、そしてアリスト

テレスが万有の種について出した「境界が明確でない」、「直線的に並ぶ」という二つの「連続」の概念が出発点となり、自然の体系を表す様々なイメージが生まれることとなった。

「充満」の概念と「境界が明確でない」という「連続」の概念の組み合わせから、「網」と「地図」のイメージが生まれた。「網」のイメージにおいては、「境界が明確でない」という「連続」の概念が「密接な複合的な結びつき」という自然の捉え方まで表している。「充満」に「秩序」の概念が結びついて、「階級社会」のイメージとなった。この時「秩序」は「直線的」な「連続」の概念と結びつき、「上下」関係のある「秩序」へと特定化された。この「上下」関係のある「秩序」をより視覚的に明らかに表すのが、「階梯」のイメージである。

「直線的」な「連続」の概念は、「輪」が一つ一つつながった「鎖」のイメージになった。「直線的」な「鎖」のイメージは、(18)のように線上に物が並ぶイメージにも、(19)のように何本もの短い線が物を結びつけるイメージにも変化する。

(18) X X X X X X

(19) X ——— X ——— X ——— X ——— X ——— X

(18)のイメージによる「直線的」な「連続」の概念は、「連続」を成すための「基準」の存在を要求する。アリストテレスは「生命と運動性」の程度差を「基準」として、自然界の万物の「連続」性を謳った。「生命と運動性」を感じさせない物から、植物、そして動物へと「生命と運動性」をより強く感じさせるものへという「連続」を提示した。キリスト教の時代になると、キリスト教世界における、万物の「価値」が「基準」となる。神は最上位に位置するのだが、その下に、天使、人間、動物、植物、鉱物と並ぶ。そして18世紀から19世紀にかけて、種の恒常性が否定されると、「種の生成の時期」が、「直線」のイメージ上に万物が並ぶための新たな「基準」となった。具体的にはそれぞれ次にあげる(20)(a)~(c)のような並びになる²⁾。ただし、(20)では(18)に矢印が加わっているが、これは万物自体の「変化」を表すものではなく、単に「基準」軸上の値の違いを示すものである。

2) (20)(c)は、ラマルクの表をもとにしたが、一部省略して利用している。

- (20) (a) 無生物 植物 動物 → 生命と運動性
- (b) 鉱物 植物 動物 人間 天使 神 → 宗教的価値
- (c) 蠕虫類 昆虫類 軟体類 魚類 鳥類 哺乳類 → 生成の時期

(18)における物 X がただ基準軸上に並ぶのに対し、一方(19)では、一つ一つの物が結びつく「理由」の存在が要求される。エラズマス・ダーウィンは“CAUSE & EFFECT”（原因と結果）という結びつきの「理由」を提案した。新プラトン主義の「ポルピュリオスの樹」も、この結びつきを表していると言えるだろう。ラマルクの「さまざまな動物の起原を示す図」は、「原形と変形」の関係で二つのものが結びついている。短い直線部分が表すのは(20)の場合のような基準軸ではなく「変化」である。ただし、「変化」は時間の経過を含むので、(20)(c)「生成の時期」の基準軸とも重なりやすい。ラマルクの図も、(20)(c)と(19)の両方のイメージを含んでいる。この場合、矢印は、基準軸上の値の違いと、個体の変化の方向の両方を表すことになる。

以上の考察から、いくつかの概念の組み合わせが、様々なイメージを生み出し、また逆にこのイメージの読み替えやわずかな変形が新たな概念を生み出してきたことが、明らかになった。特に「直線」のイメージは様々な読み替えを許容するものであり、このことが様々な理論の変化をも許容してきたと言える。アナロジーにおいては、このように、理解したいものとこれを表すためのイメージが相互に働き合い、共に変化を引き起こし合うのである。

参考文献

- アリストテレス『動物誌』（島崎三郎（訳）1969 『アリストテレス全集 8』岩波書店）
- 長谷川真理子・三中信宏・矢原徹一 1999 『ダーウィン著作集 現代によみがえるダーウィン』文一総合出版
- 廣松 渉他（編）1998 『岩波哲学・思想事典』岩波書店
- プラトン『ティマイオス』（種山恭子（訳）1975 『プラトン全集12』岩波書店）
- ポルピュリオス『イサゴーゲー』（田中美知太郎（訳）1976 『世界の名著 続 2 プロティノス ポルピュリオス プロクロス』中央公論社）
- Darwin, Erasmus, 1794-96, *Zoonomia*, With a new pref. by Thom Verhave

- and Paul R. Bindler. 1974, AMS Press.
- Goerke, Heinz, 1989, *Carl Von Linné: Arzt, Naturforscher, Systematiker*, Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft mbH. (梶田 昭 (訳) 1994『カール・フォン・リンネ』博品社)
- Jussieu, A. L., 1789, *Genera Plantarum Secundum Ordines Naturales Disposita, Juxta Methodum in Horto Regio Parisiensi Exaratam*, Reprint by J.Cramer and Weinheim, 1964, Wheldon & Wesley, Ltd. Stechert-Hafner Service Agency, Inc. Codicote, Herts.
- Lamarck, Par J.-B.-P.-A., 1809, *Philosophie Zoologique*, Dentu, Reprint in 1983, Culture et Civilisation.
- Lamarck, Par J.-B.-P.-A., 1809, *Philosophie Zoologique*, Dentu. (高橋達明 (訳) 1988『動物哲学』木村陽二郎 (編)『ラマルク』朝日出版社)
- Larson, J.L., 1994, *Interpreting Nature*, The Johns Hopkins University Press.
- Linnaeus, C., 1735, *Systema Naturae*, Facsimile of the First Edition, Nieuwkoop & B. De Graaf.
- Lovejoy, Arthur O., 1936, *The Great Chain of Being*, Harvard University Press. (内藤健二 (訳) 1975『存在の大いなる連鎖』晶文社)
- Patrides, C.A., 1973, "Hierarchy and Order", Wiener, P.P. (eds.) *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, Scribner. (村岡晋一 (訳) 1990「ヒエラルヒーと秩序」『西洋思想大事典3』平凡社)